

伝文

日本口承文芸学会会報
〈伝文〉第9号 1991年9月

発行 日本口承文芸学会
〒112 東京都文京区白山5-28-20
東洋大学・東洋学研究所 気付
電話03-3945-7483

伝承の実態に即して

会長 大島建彦

日本口承文芸学会の創立から、すでに14年の歳月を経て、日本における口承文芸の調査は、いよいよ厳しい状況におかれており、おのずから何らかの対処を迫られているようである。いうまでもなく、経済の高度成長期を通じて、僻地村落の過疎化とともに、都市周辺の過密化が進んでおり、口承文芸の伝承を含めた、民俗文化の全面的にわたる、きわめて急激な変貌があらわれてきた。そして、経済の低成長期に入ると、生活環境の激変におどろかされて、民俗文化の価値が見なおされ、すこしずつ行政上の施策もとられるようになった。特に地方史などの編纂と結びついて、昔話などの口承文芸が取りあげられ、改めてその伝承の衰滅を思いしらされるのがすくなくない。

それにつけても、もともとこの学問の宿命として、性急な近代化の動きのなかで、貴重な民俗文化が失われてゆくという、深刻な危機感につらぬかれていたことは忘れられない。かえりみると、

終戦の前後の混乱のさなかには、昔話などの採録の道は絶たれたように思われていた。それにもかかわらず、昭和30年代から40年代にかけて、新しい研究の気運にささえられながら、これに関する精細な調査が進められて、まことに多大の実績をおさめてきたことはいうまでもない。そういうわけで、現在の緊急の要請にこたえるためには、ただいたずらに昔話の衰滅をなげくだけではなく、いっそうひろい範囲の口承文芸について、できるかぎりその伝承の実態に迫ることが求められるであろう。現に関東やその周辺では、地方史や文化財の報告を通じて、地域ごとに世間話などの整理が試みられて、それぞれに顕著な成果をあげているといつてよい。さしあたり、そのような実地の調査にたずさわる方々によって、新しい問題の提起がおこなわれるのは、日本口承文芸学会の進展のためにも、もっとも切実に望まれることであろう。(東京都 新宿区)

1990年度第2回研究例会

1990年度第2回(通算20回)の研究例会は、91年3月16日午後、中央大学駿河台記念館で開催され、荻原真子、竹原威滋、桜井美紀の三氏による研究報告がなされた。討論の司会は飯豊道男氏が担当された。以下の報告は、三浦佑之氏と常光徹氏に記していただいた。

荻原真子氏の発表「神話と英雄叙事詩の間 — アイヌの口承文芸、神謡『カムイユウカラ』について」では、アイヌ神謡における一人称叙述体の問題を中心に神謡の成立が論じられた。アイヌの

叙事文学が一人称叙述をとるといふのは周知のことだが、北方諸民族の表現との関わりを追い続ける荻原氏の今回の発表は、久保寺逸彦『<アイヌ叙事詩>神謡・聖伝の研究』に採録された神謡群を分類し、それらが多様なモチーフをもつことを指摘したうえで、「動物世界と人間世界との関係をテーマとする神謡」のうち、動物神が自分の失敗を子孫たちに<遺戒>として語り伝えるものと神として崇められているいわれを<垂範>として語るものが神謡の基本型であったと指摘する。そしてそれらはシベリアの少数民族において動物昔

話が狩獵儀礼の中で呪術的な性格をもって語られていたというあり方を想起させ、アイヌ神謡の成立も狩獵儀礼に関わるのではないかと論じる。発表時間の制限もあって詳細は論文発表を俟つ必要があるし、一人称叙述体がシベリアの伝承には顕著ではないなど問題点も残るが、口承文芸研究における主要テーマである一人称叙述を考えるうえでの重要な示唆を含んだ発表として聞いた。また、メモ的にふれられた神謡と聖伝と英雄叙事詩の成立はそれぞれ別なのではないかという発言も、具体的に論じてほしい問題である。(三浦佑之)

昔話のなかには、明治以降の翻案による話が各地に定着していった例がいくつかあり、近年注目をあつめている。

3月16日の研究例会における、竹原威滋氏と桜井美紀氏の「昔話『味噌買橋』をめぐって」の発表は、そうした観点から、「そのヨーロッパにお

ける書承と口承をめぐって」および「その日本における翻案と受容」について論じたものだった。

竹原氏は、主にヨーロッパと中東に伝えられる「宝は我が家に」(AT1645)の数多い事例とともに、各要素間の異同をくわしく分析された。ヨーロッパでは、夢の告げを信じた主人公が橋の上で幸運を手に入れるケースが多い。ただ早くはモスクと結びついたアラビア系の話であったのが、ヨーロッパに伝播したのち橋に変わったのであろうとの指摘は興味深かった。

桜井氏は、「味噌買橋」の豊富な事例を検討した結果、この話が翻案を通じてわが国に受容された可能性の高いことを述べられた。その間の具体的な検証は今後待つところが大きいですが、一つの手掛りとして、山崎光子(1882~1964)の仕事や、長年口演童話にたずさわってきた伊東肇位(1901~1991)などの活動に注目する必要があることを指摘された。(常光徹)

1991年度日本口承文芸学会大会報告

1991(平成3)年度の第15回大会は、6月1日(土)~2日(日)の2日間にわたり、茨城県つくば市の筑波大学学生会館を会場として開催された。参加者は約110名。

初日は、武田正氏(筑波大学)の「昔話の異化効果と相乗効果」の講演をうかがったあと、3人の研究発表があり、会員総会に移った。

会員総会では、1990年度の事業・会計・機関誌14号などの報告事項が承認され、つづいて1991年度の事業計画・予算案・機関誌15号の計画などが審議され、承認された。

また1992(平成4)年度の大会を東洋大学で開くことが承認されるとともに、学会の英訳名の件(次ページ参照)などについても話しあわれた。

総会終了後、トレモント・ホテルで懇親会がもたれ、地元主催者のご配慮により、全国各地からの出席者が楽しく歓談のひとつときを過ごした。

二日目は研究発表とシンポジウムが行われた。

初日と二日目の研究発表者と題目は次のとおり。
橋弘文氏 徳島県吉野川流域に伝わる「首切れ馬」伝説の異話の生成について

川添裕希氏 運定め話の系譜 — 因縁話の成立
中村雄祐氏 武勲と犯罪・マンデの狩人の楽師の現在 (以上、初日)

出口顕氏 適正な距離・反復・媒介 — 牽牛織女神話の構造分析試論

田中浩子氏 話型研究 — 「鼠浄土」「地藏浄土」「鬼の楽土」

中原ゆかり氏 奄美の八月踊り — 歌と踊りの関係を中心に (以上、二日目)

シンポジウムは、二日目の研究発表のあと、小池淳一、重信幸彦両氏の司会により、「〈口承〉研究の「現在」 — ことばの近代史のなかで」と題するテーマをめぐって行われた。パネリストの重信幸彦、久野俊彦、中村雄祐、佐藤健二の各氏の発表のあと、活発な討論をおこなった。

【学会の英訳名について、ご意見をお寄せください】 1992年6月に東洋大学で開かれる総会で結論をだしたいとのことで、『伝え』次号(2月刊)にも意見をのせます。1991年10月末までに事務局へ、なるべく短文で。(つくば大会では、Folk·Narrative の代案として Folk·Literature, Oral·Folklore, それに Oral·Literature が報告された。もちろん現状のままも一つの案である。)

【学会の英訳名について】 『伝え』の第2号で荒木博之氏から提起された、この問題について、つくば大会の総会で発言されたお二人に、ご意見を記していただいた。(前ページのかこみ参照)

創立のさいの経緯

小澤 俊夫

一つの提案

竹原 威滋

現在の学会の英訳名について、改正の意見が出ている由で、学会創立当初の委員であったため、これに関わった一員として、その経緯を書くよう求められた。

小生の考えでは、この問題は、基本的には学会名そのものではなく学会の英訳名なので、英語を使って口承文芸研究に携わっている会員の意見によって決められればよい、ということである。

問題になっているのは、わが学会名である「口承文芸」が、英語で何と表現すれば最も正確であるか、という点にあるようである。それこそ正に、英語を使って口承文芸研究に携わっている会員の意見でことばを選べばよいことだが、小生の経験を記せば次の通りである。

1966年、西ドイツ・ゲッティンゲンの民俗学研究所に、Enzyklopädie des Märchens の編集のため半年間滞在した折、Kurt Ranke 教授から International Society for Folk-Narrative Research のことを教えてもらった。その時、ランケ氏は、「Folk-Narrative」ということばは、人によっていろいろに使うので、この議論を始めたら切りがないが、我々は広く口伝えされた文芸全般を指すことばとして使っている。したがって、この学会では伝説もバラードも神話との境界にあるような口伝えも扱っている」と説明してくれた。現に学会の発表を見ても、それらがふくまれている。

日本口承文芸学会の創立に当って、英訳名を考えなければならなくなったとき、小生はランケ氏のその説明を思いだし、広い意味でのそのことばを提案し、当時の委員から支持され、総会でも支持されたのである。

しかし、創立以来10年以上を経たし、英語関係の会員がより適切と思われる表現があるならば、改正するのがよいと思う。

むしろ大切なことは、英語などの外国語で研究を発表することなのだ、と小生は考えている。これを機会に、学会誌に欧文の論文を採用することを提案したい。

(川崎市)

今、学会名の英訳をめぐって論議を呼んでいる。そもそもの発端は、著名な国際学会である International Society for Folk-Narrative Research に準じて、わが学会の英語名を Society for Folk-Narrative Research of Japan としたことにある。なるほど、この英語名の略称 SFNRJ を見ただけでも、世界の研究者は、国際学会 ISFNR の連想から「ああ、これは Folk-Narrative の日本の学会だな」とすぐに納得するであろうから、実に賢明な命名であった。しかしながら、むしろ国内の会員のなかから、疑義がさしはさまれた。それはなぜなのか？

すでに『伝え』の2号で荒木博之氏が述べているように、narrative というとは story とか tale とほぼ同義語であるから、folk-narrative には民謡とか諺などが含まれないからだろう。わが学会は創立当初より説話と歌謡の研究者が参加しており、研究発表や学会誌の編集においても、いつも両ジャンルのバランスに配慮してきたので、主として説話を扱う国際学会 ISFNR とは、この点で事情が異なるわけである。

さて、それではどうするか？ folk-literature とすれば、民衆本などが含まれるし、folklore や oral traditions とすると、文芸以外のものも含まれるであろう。それに隣接する学会（たとえば民俗学会、説話・伝承学会、昔話学会）の英訳名とまぎらわしい用語は避けるべきである。

そこで、ずばり oral literature を採用してはいかがだろう。これだと、柳田国男がフランスのポール・セビヨの言う littérature orale に「口承文芸」をあてたゆえんの言葉であり、もちろん昔話・伝説・民謡・謎・唱え言などを含んでいる。最近、この矛盾をはらんだ oral literature という用語が、英語圏でも書名などにも用いられてきており、市民権を得つつあるようだ。そこで学会名として、慣用的な表現を考慮して次の英訳を提案したい。The Japan Society for Oral Literature Studies.

(大阪市)

第14回松山大会でのシンポジウムは、終了後さらに広がってゆく様々な思いを残した。奄美の歌文化にとりくむ私としては、レコード学習世代の歌が、何度歌っても自由な歌掛けにならず、レコードジャケットに記載された3節程度の歌詞をなぞることを発見して以来、録音機器の作用が文字とパラレルに考えられた（自分の歌を録音して繰り返し聞き、節まわしを工夫する行為も、文字による推敲を思わせる）。そして藤井貞和氏の言う「時計の出現という不可逆の状況と、それにより失われた“生き生きした時間の流れ”の回復」の比喻は、とりもなおさず「電気メディアの出現と、“口頭性（orality：声で発し、耳で聞くことによるイマジネーションの喚起力）”の回復」におきかえられる。

'70年代のカセットコーダーの普及は、音情報を小型化し、'80年代を通してウォークマンが、その持ち歩き・個人化・コピー化・商品化を日本のすみずみまで推し進めた。顔と顔を見合わせる対面状況を通しての真正な口頭性と、電気メディアを介在した二次的（疑似的？）な口頭性がないまぜに存在する今日、両者の相互作用を注意深くみてゆくことが必要であろう（大衆レベルでの生きた局面としては、カラオケ、テレビ画面を通しての語り、上野・原宿の大道芸、口こみネットワーク

による都市伝説などが、とりあえず思い起こされる）。

民俗音楽も上記の相互作用抜きには存在しない。舞台化などの新しい局面と同時に、これまで自明としてきた口承の歌謡の特質も、より具体的に明らかにされねばならない。それにつけても、桜井美紀氏の指摘する「うたごころ」=肉声の音の響きやリズムの原体験は、やはり大きな意味を持つと思われる。

20代・30代の島唄の歌い手は、レコード・テープ学習が大きな比重をしめる。にもかかわらず、彼らのライフ・ヒストリーに共通するのは、幼いころ身内に歌好きがいて、母の背中で、家庭の中で、シマウタに身を浸しながら育ったという体験である。こうした口頭性の「原質」が今後どう進展してゆくか予断を許さないが、民俗文化の深層的なしぶとさきも痛感する。

今日の局面ではメディア論も重要であり、一方では伝統文化の脈絡とは別に、同時代的都市状況の比較が有効であろう。いずれにしる川田順造氏のいう「共通語・文字・二次的口頭性による音声の規格化」はぬぐいがたい現実なのだろう。今を生きる様々な問題を、今後も学会員の方々と共有しつつ考えてゆければと思う。（'90.6.5 記す）

〈投稿〉（東京都 府中市）

— 受贈書リスト —

徳之島郷土研究会報（第15号） 鹿児島県徳之島郷土研究会 89.11

北の語り（第6号） 91.2

同志社国文学（第34号、第35号） 同志社大学国文学会 91.3

山北町民俗論集 1991 新潟県山北町教育委員会 91.3

国際日本文学研究集會會議録（第14回） 国文学資料館 91.3

佐渡・佐和田町昔話集 大谷女子大・説話文学研究会 91.3

日本民俗学（186）1991 日本民俗学会 91.5

☆今号は変則的な構成で、連載欄を休み、また前号との間隔が短いので受贈書リストのみとしました。

印刷は時間がないたため、ワープロとコピーで試みてみました。〔編集担当：飯倉・常光・徳田〕

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求ください。 入会金1,000円、年会費4,000円。
入会申込書請求・送金先：〒112 東京都文京区白山 5-28-20 東洋大学・東洋学研究所 気付
日本口承文芸学会事務局（TEL.03-3945-7483） 振替：東京 8-44834
The Society for Folk-Narrative Research of Japan, c/o The Institute for Asian Studies, Toyo University, 5-28-20 Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 〒112, Japan.

口承文芸に関心のある方を広くご紹介ください